

IV Guidance on Study Abroad (Annual Report(2nd semester, 2019-1st semester, 2020))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊井, 浩子, 松田, 紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028201

IV 海外学生派遣

熊井 浩子／松田 紀子 他

国際連携推進機構では、例年在校生の海外留学を推進するため、『静岡大学からの海外留学』（海外留学に関するガイドブック）を作成・配布するとともに、4月の新入生ガイダンスの際に機構ニュース及び「静大からの海外留学」（海外留学パンフレット）を配布しているほか、年2回の海外留学フェア（留学全般の説明会）及びそれぞれのプログラムごとの説明会や報告会を実施している。併せて、過去の留学プログラムやイベント等の参加者のメーリングリストやHP・電子掲示板等での募集情報やイベントの紹介等も行ってきた。また、国際交流課（静岡キャンパス・共通教育A棟4階）及び国際連携推進機構資料室（浜松キャンパス・合同棟1号館3階）に、各国別の最新の資料を提供する棚を設置し、派遣留学やTOEFLに関する情報提供を行っている。

令和元年度後期には従来の海外留学フェア（留学説明会）やプログラムごとの説明会などの従来の広報に加え、同年7月にプレオープンした国際交流ラウンジを活用した留学説明会や留学報告会、留学経験者との交流活動や英語ネイティブの講師による週2回の英語ラウンジによる英語学習・留学支援が行われた。令和2年度前期からはFacebookやHPでの留学の勧めやプログラム紹介ページの刷新など、Webによる留学情報の提供を充実させた。

また、地域に広く静岡大学の教育・研究活動を知ってもらうために毎年11月の大学祭の際に開催されている静大フェスタに昨年度より参加、特に平成元年度は留学などの国際的な教育プログラムや交流活動に参加している学生、留学生のプレゼンテーションや懇談などの活動を行い、地域の高校生を含む来訪者に静大のグローバルな魅力を伝えることができた。さらに、派遣予定先の協定校関係者が来訪した際は、留学予定者との懇談会を開催し、ネットワークづくりのサポートや情報提供を行った。

しかし、令和2年3月以降、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い従来とは大きく異なる対応を余儀なくされた。まず、国際連携推進機構が実施しているプログラムについては、3月19日に派遣先が感染症危険レベル2以上の場合には特別な事情がない限り留学を延期または中断・中止するという要請が出された。また、ゴールデンウィーク明けには12月までのプログラムが中止となり、ついで8月の時点で令和3年3月までの派遣が中止となった。これに伴い、機構では派遣中または派遣予定だった学生達の帰国や復学・単位認定、今後の留学計画等のサポートを行った。平成29年度に国際連携推進機構HP上に「海外渡航前の手続き」ページを開設、平成30年前期には「国立大学法人静岡大学における海外渡航に係る危機管理規則」を制定して、その内容に基づいた「海外渡航の危機管理マニュアル」を教職員向け・学生向けに分けて作成してWEBサイト上で公開し、併せて安全管理のためのOSSMA加入を呼びかけるなど海外安全の情報提供を行ってきたが、このような事態に備えてのマニュアル等の整備やHP・ガイダンス等での事前の周知が今後の課題となった。

令和2年度派遣予定者のための危機管理ガイダンスを含む交換留学派遣前ガイダンスや

アカデミックイングリッシュの勉強会、夏季短期留学説明会、TOEFLの説明会・勉強会も中止とした。他方、これから留学を検討する学生を主な対象として、オンラインでのイベント「留学体験・英語の勉強方法」(6月)、「IELTS説明会」(7月)が行われた。

令和2年度前期でもう一つ特筆すべき点は全学教育科目英語科目部との連携強化である。以前より、夏季短期研修等の留学プログラムの英語科目認定や語学試験、国際交流ラウンジ等のイベントの広報等を双方で協力して行ってきたが、同学期より国際連携推進機構教員が英語科目の一部を担当したほか、国際交流課を通じて授業や留学・交流イベント等に関する情報を双方で広報し合う体制ができた。

令和元年度後期から2年度前期までの主な派遣プログラム及び活動状況は以下の通りである。

1. 大学間協定に基づく交換留学

令和元年度後期には令和2年度大学間協定に基づく交換留学派遣予定者として以下の10か国、13大学に24名の学生が選考された。括弧内は、当該学生の所属学部を表す。

昨年度の21名から見るとやや持ち直した感がある。また、ドイツのイエナ工科大学、フィリピンのマリアノマルコス大学への応募・合格が初めて実現したこと、マレーシアへの留学希望が継続していること、さらには工学部・工学専攻の派遣者が6名と、1/4を占めていることも特徴的である。

アメリカ ネブラスカ大学オマハ校 2名(工学部・総合科学技術研究科工学専攻各1名)

マレーシア マラヤ大学 2名(理学部・工学部各1名)

ドイツ ヴッパタール大学 3名(人文社会科学部2名・総合科学技術研究科工学専攻1名)

ドイツ ブラウンシュバイク工科大学 2名(情報学部・工学部各1名)

ドイツ イエナ工科大学 1名(工学部)

スロバキア コメニウス大学 3名(人文社会科学部2名・教育学部1名)

チェコ マサリク大学 2名(人文社会科学部・教育学部各1名)

ラトビア リガ工科大学 2名(工学部)

ブルガリア ソフィア大学 3名(人文社会科学部2名・理学部1名)

ルーマニア アレクサンドル・イワン・クザ大学 1名(人社会科学部)

フィリピン マリアノマルコス大学 1名(教育部)

韓国 釜山大学校 1名(人文社会科学部)

韓国 忠南大学校 1名(理学部)

交換留学選考後には派遣前に日本エマージェンシーアシスタンス株式会社による危機管理ガイダンスを含む全3回の留学前ガイダンスを実施し、留学前の準備や危機管理等に関する講義、留学経験者や協定校からの留学生も招いたディスカッション等を行うことによ

り、学生自身が主体的に準備に取り組めるような機会を提供している。また、平成26年度からは報告書に加え、留学前から留学後のキャリア形成も視野に入れた留学ポートフォリオ作成を義務づけるなど、留学を次のステップに結びつけるための指導を行っている。

令和元年度派遣者については、令和2年2月及び3月出発予定の3名を除いた18名が令和元年8月～10月・令和2年2月に留学を開始している。ただ、前述のとおりCOVID19の影響で、それ以降も留学継続予定であった学生もやむを得ない事情があるごく一部のケースを除き3月・4月のプログラムを中断して帰国している。令和2年3月出発予定だった1名は出発前にプログラムが中止となった。

機構ではこうした学生への安全な帰国やスムーズな復学のサポートを行なうとともに、オンラインでの継続的な学修を支援しており、令和2年度前期は4名の学生が協定校の授業を引き続きオンライン授業を受講した。平成30年度以降交換留学を無事修了し、成果報告などの所定の要件を満たした学生に対し、「本学以外の教育施設等における学修」として、帰国後申請に基づき、全学教育科目の学際科目「海外交換留学プログラムⅠ」「海外交換留学プログラムⅡ」（各2単位）を認定しているが、現地での留学期間自体は短縮されても、このような帰国後のオンライン受講も含めた形で交換留学生としての学びを単位として評価できるような工夫を行なっている。

2. ILUNO (Intensive Language Program at the University of Nebraska at Omaha : ネブラスカ大学オマハ校集中語学プログラム)

令和元年度アメリカ・ネブラスカ大学オマハ校における集中語学プログラムにILUNOに15名（人文社会科学部7名、教育学部2名、情報学部2名、理学部1名、工学部3名）が参加した。そのうち、人文社会科学部の1名を除く14名は協定に基づく136週分の授業料免除枠での参加である。なお、1月30日に渡航前ガイダンスを実施した。

また、令和2年度募集に先立ち、ILUNO説明会を実施する予定だったが、コロナウイルスの影響によりオンライン動画提供という形での実施となった。また、平成2年3月時点での留学者は途中帰国となった。さらに、令和2年8月より2名がオンラインによる授業を受講した。

3. 令和元年度春季短期留学

国際連携推進機構では、提供する短期の語学留学プログラムの選択肢を広げ（渡航先、設定期間）、既存の短期留学プログラムと運営面、内容面で異なる形式のプログラムを提供することを意図して、平成25年度より春休みにイギリス・中国での短期留学を、次いで27年度よりフランスの夏季・春季短期留学プログラムを開始した。各プログラムの実施概要は以下のとおりである。

① イギリス、グロスタシャーカレッジ短期語学研修

A) 実施概要

期 間：令和2年2月22日(土)～3月25日(水)、4週間

研修機関：イギリス グロスタシャーカレッジ (Gloucestershire College, UK)

参加者数：18名（教育学部7名、人文社会学部5名、工学部6名）

渡航前ガイダンス（3回）：12月12日、1月16日、2月6日

英語コース：

グロスタシャーカレッジのGeneral Englishコース。全授業時間は82時間（20.5時間×4週間）コース開始時にプレースメントテストを受け、レベル別にクラスに配置される。

B) 成果と課題

前年度までの研修先（University of Gloucestershire, INTO, UK）が受入不可となったため、同じ都市の異なる教育機関に研修先を変更しての実施となった。コロナウイルスの感染の広がりが懸念され始めた時期に始まった研修であったため、出発時のオリエンテーションを追加で実施した。帰国時には専用のバスで空港まで出迎え、参加者全員が14日間の自宅待機をした。

終了後に参加者を対象にしたアンケートでは、回答者9名が「プログラム全体」の項目で「満足」もしくは「どちらかといえば満足」と答えた。「ホームステイ」については1名が「どちらともいえない」を選んだ以外は、「満足」もしくは「どちらかといえば満足」と答えた。コロナ禍で受け入れ先の確保に困難が伴う中でホームステイが実施できたこと自体が良かったが、期間中に2つのホームステイ先を使う、1つの部屋を他の参加者と共用する参加者もあり、十分な受け入れ環境とは言えない部分があった。そうした中でもホストファミリーとの交流や外出を楽しんだ者も多くおり、回答者の満足度は全体ではそれほど悪くない。しかし、イギリスの短期研修のホームステイ先の確保は、以前から難しい状況が続いており、今後も同様の問題が予想される。

「英語の授業」については回答者9名のうち「不満」1名、「どちらかという不満」2名、「どちらともいえない」2名と、例年よりも評価が低かった。コメント欄に「レベルが低い」「日本人が多い」「授業内容が単調」等が不満の理由としてあげられている。今後の研修実施に際しては、可能な事項については改善が求められる。

プログラムのその他の点について評価を尋ねた質問では、ロケーション（チェルトナム）については満足度が高いが、有料の課外活動については満足度が低かった。カレッジ運営した有料の課外活動は、事前に内容の詳細情報が十分でないまま申込をする必要があったため、予想していたものとのギャップが大きく不満につながったようである。課外活動について、今後は前年度までと同様に各参加者が現地を手配する方法に戻すことを検討する。

留学の成果を聞いた質問では、「英語で会話することの不安が減った」、「英語を勉強するモチベーションがあがった」、「海外の人たちとの交流に前向きになった」に回答者9名全員が、「あてはまる」、もしくは「どちらかといえばあてはまる」と答えている。

コロナウイルス感染拡大の留学への影響を聞いた質問では、「予定をしていた旅行に行くことができなかった」8人、「参加できないイベントがあった」、「行くことができない訪問先があった」が5人で、「ホームステイ先に変更があった」ものも5人おり、コロナの影響で参加者が計画していた活動が十分にできない面が見られた。一方で、コロナ禍での変更事項を体験するのもよい機会であり、学校生活、ホームステイを楽しみ充実した日々を送れたというコメントもあり、冒頭に触れたようにプログラム全体の満足度は高く、研修と

しての目的、成果は果たせたものと考えてる。

② フランス夏季・春季短期留学プログラム

A) 概要

本プログラムは、フランスの公式機関であるフランス政府留学局 Campus France パリ本局により平成27年度から日本の大学の夏季及び春季休暇に合わせて提供されているものである。本学は開始時から短期プログラムと位置づけ、平成30年度より研修修了後フランス語科目（全学教育科目）2単位の認定可能とした。また、夏季プログラムは、令和元年に8月及び9月の2プログラム開催に増加された。

以下では、本学からの当該期間の参加状況について記す。

期 間：令和元年9月2日～9月27日、前後に移動日。

参加者数：1名（人文社会科学部）

研修機関：サン＝ティエンヌ大学附属 ティエンヌ大学附属 語学・文明国際センター（Le CILEC de Sainte-Etienne）。プログラムでは派遣先として、グルノーブル大学附属フランス語教育センター（Le CUEF de Grenoble）もある。

費 用：約50万円

プログラム費用（受け入れ先語学学校の登録料・授業料、フランス滞在中の健康保険料、宿泊費、文化アクティビティ参加費、グループ単位での空港送迎費）として、2100ユーロ（大学寮個室）あるいはホームステイ（朝・夕食込み）2500ユーロ。これに、参加学生が各自で手配する日本国内移動及び日本・フランス往復旅費が加わる。

プログラム内容：

①フランス語短期集中講座：受講生は、個別面接を含むクラス分けテストを受け、個別カルテが作成されるとともに、それぞれのレベルに合ったクラスに配置される。月曜から金曜まで、受講時間数は週25時間、4週間での総受講時間数は100時間。フランスの文化や文明をも学べるよう、授業では、広告、メディアの記事、ビデオ、文学作品など、実際の資料を用い、多様な言語活用シーンを想定して、コミュニケーションを重視したアプローチをとっている。到達レベルを記した証明書を、プログラム終了時に発行。

②文化・スポーツアクティビティ：一日または半日のさまざまなアクティビティや社会見学などを企画。

B) 成果と課題

本プログラムは、研修機関として質の高い機関への短期学生派遣を、学内の運営コストを抑えて実施できるプログラム（申し込み手続きは大学がCampus Franceとの間で行うが、現地空港到着・出発時のグループ単位での「送迎」サービスが含まれているため大学教職員等の引率は不要）として、参加学生の人数の多寡によらず、継続して提供することとしている。

③ 中国

静岡大学の中国春季短期留学は当初、北京華文学院が派遣先であったが、当校の静岡大

学生のための留学プログラムの最少催行人数は5名であり、応募者不足で実施不可能な年が連続した。しかし、5名には至らずとも中国短期留学を希望する学生は毎年1～2名はいるため、平成30年度より静岡県文化・観光部大学課学術班主催の浙江万里学院中国語研修（県内各大学1名から参加可）に派遣し、静岡大学として初修外国語（中国語）の単位を認定する仕組みになっている。

令和2年2月に静岡県主催の浙江万里学院中国語研修に1名派遣予定だったが、コロナウイルス感染拡大の影響で参加を辞退した。

4. 夏季短期留学

例年8月に3週間前後、アメリカ・ネブラスカ大学オマハ校、カナダ・アルバータ大学、韓国・朝鮮大学の3つの機関で実施されている夏季短期留学は前述のとおり、中止となった。

5. 協定校の短期研修プログラム：

当該期間に下記の協定校短期プログラムの募集があり広報したが、本学の参加学生はなかった。

- 韓国・釜山大学校サマースクール（2020年6月24日～8月11日）（中止）
- 韓国・慶北大学校サマースクール（2020年8月17日～8月28日）（オンライン）
- 韓国・忠南大学校サマースクール（2020年6月25日～7月23日）
- インドネシア・ガジャマダ大学（2020年7月15日～7月28日）
- マレーシア・テイラーズ大学（2020年8月2日～8月15日）
- マレーシア・マラヤ大学（2020年7月20日～7月24日）（オンライン）
- ルーマニア・アレクサンドル・イワン・クザ大学サマースクール（2020年7月5日～7月18日）（オンライン）

6. VSCP（Visiting Students Certificate Program）説明会実施

カナダ・アルバータ大学で行われている語学研修と専門科目の単位取得を組み合わせたプログラムであるVSCPの令和元年度後期派遣者は1名（派遣期間：6か月間）で、3月にプログラムを中断して帰国した。令和2年度派遣予定者は4名（派遣期間：6か月～1年）であったが、派遣が中止となった。なお令和2年7月よりIVSP（International Visiting Student Program）と名称が変更されている。

7. トビタテ留学JAPAN

静岡大学ではこのプログラムに採択されて令和元年度後期までに留学を開始した学生は計5名（うち地域版2名）となっている。27年度からこのプログラムの説明会を開催しているが、28年度からは留学経験者が中心となって広報や説明会を開催するなど、大学の中でもトビタテのコミュニティーが着実に広がっていることがうかがわれる。

また、国際連携推進機構でも応募時やプレゼンテーション前等のサポートにも力を入れている。しかし、こちらも新型コロナウイルスの影響により、3月以降留学を中断・中止

せざるをえなくなった。

期	コース	滞 在 先	期間(か月)	所 属 学 部
2	新興国	中国	10	人文社会科学部
2	多様性	ニュージーランド	12	教育学部
4	多様性	フィリピン・タンザニア・オランダ	7	教育学部
4	多様性	ドイツ	12	人文社会科学部
4	多様性	アメリカ	6	人文社会科学部
5	理系	ドイツ	12	工学部
5	新興国	グアテマラ・パラグアイ・アルゼンチン	12	人文社会科学部
7	世界トップ	フィンランド	23	自然科学系教育部
10	理系	オーストラリア	9	総合科学技術研究科
10	新興国	マレーシア	10	人文社会科学部
10	多様性	チェコ、ドイツ	11	人文社会科学部
11	理系	ラトヴィア	10	総合科学技術研究科
11	理系	アメリカ合衆国	11	自然科学系教育部
12	理系	オランダ	10	農学部
7	地域人材	ドイツ	2	人文社会科学部
9	地域人材	カナダ	8	総合科学技術研究科工学専攻
9	地域人材	アメリカ	6	総合科学技術研究科情報学専攻
9	地域人材	ニュージーランド	12	地域創造学環
10	地域人材	チェコ	5	教育学部
11	地域人材	フィリピン・マレーシア	12	工学部

8. フィリピン短期研修

留学プログラムの多様化が本学の課題の一つであるが、かねてより学生からフィリピン留学やボランティア研修の問い合わせが多かったことから、フィリピン・イロイロにある Green International Technical College (以下、GITC) で行われていたプログラムを大学の春休みのスケジュールに合わせて令和2年3月1日から14日と設定し、国際連携推進機構が支援する形で英語研修(マンツーマン授業+グループ授業)プラスボランティアSDGs

ツアー（フィリピン文化紹介、先住民族コミュニティ訪問）の短期研修プログラムを実施した。周知期間が短かったにも関わらず、2名の参加があり、最後の1日半はコロナウイルス感染症の影響でオンライン授業となったが、事後のアンケートでの参加者の満足度は非常に高かった。うち1名は令和2年度後期より交換留学派遣予定の学生であった。

マンツーマンが中心で、ボランティア体験など内容的にも充実したプログラムでありながら、安価で気軽に参加できるということで、今後も引き続き実施し、留学前の語学準備コースとして、大学のプログラムとして位置付けることを検討していたが、コロナの状況が改善しなかったため、令和2年8月から9月にかけてはオンラインによる1週間のライトコースと2週間のスタンダードコースという形で学生を募集し、ライトコース1名（8月31日～9月4日）とスタンダードコース5名（8月17日～8月28日または8月31日～9月11日）、計6名の参加があった。今回も事後のアンケートでの評価は非常に高く、全員が今後の英語学習や留学に対する意欲が高まったと回答している。事前説明会で留学の目的の共有等を行った結果学生同士のつながりもでき、オンラインとは言え参加者のコミュニティができたことがさらなる動機づけにつながった面もあると思われる。

GITCではコロナ収束後もオンラインによる研修を継続する見込みとのこと、現地での研修を経験してほしいという思いもあるが、一方で留学前の準備・英語力の向上という観点から見れば、居ながらにして海外でのコースが体験できるオンライン研修のニーズは今後も続くと思われる。大学としてそのメリットを活かしつつ、オンラインと現地での体験を組み合わせたコースや、オンラインであっても現地の学生や参加者同士の協働による活動を組み込んだカリキュラム設計など、さらに魅力的なプログラムとし、ゆくゆくは何らかの形で単位化を目指すことが今後の課題である。

9. 海外留学フェア

令和元年度後期は10月10日(木)に浜松キャンパス、10月17日(木)に静岡キャンパスで実施、第1部では全体的な説明及び留学経験者によるパネルディスカッションを行い、第2部ではプログラム・協定校ごとにブースを開設し、留学生を交えて個別相談を行った。浜松、静岡でそれぞれ7名、24名の参加があった。例年通り授業の少ない木曜日の午後で開催しているが、就職や教職関係の説明会等の他のイベントと重なることも多く、ラウンジを利用したプログラムごとの説明会を複数回実施するなどの新たな方法が検討された。

令和2年度前期は4月に予定されていたが実施できず、機構HP及びYou tube上に留学の勧めやプログラム紹介をアップした。木曜日の午後に参加することが難しい学生も多くいることから、今後も引き続きWebによる情報提供も並行して行うことが有効であろう。

10. TOEFL説明会及びTOEFL勉強会・TOEFL ITP（団体受験）

海外派遣の推進を目的として、TOEFLの試験情報の提供及び学内でITPテストの受験機会を設けている。令和元年度は、4回のITP（TOEFL団体受験）試験を実施した。また、TOEFL受験奨励のため、大学教育センター英語教員によるTOEFL勉強会を行った。

- 令和元年度 ITP TOEFL 学内試験

2019/5/30、2019/7/25、2019/11/7、2020/1/16

● TOEFL 勉強会

2019/6/21 13:30 - 15:00

11. 危機管理説明会

毎年6月に交換留学生の留学前ガイダンスの一環として実施されていた危機管理ガイダンスを平成29年より海外渡航を予定している全学の教職員・学生にも対象を広げて実施していたが、機構の留学プログラムの中止を受けて令和2年度は中止となった。

12. 英語科目部との連携

全学教育科目の英語科目が令和2年度入学者より新カリキュラムとなり、学生に早い段階から留学に興味を持ってもらうための科目として、英語科目部により英語コミュニケーション中級以上を履修条件とした「ESP I (留学)」が1年生を対象として開講されることとなった。国際連携推進機構の教員は、留学プログラムやグローバル・アジア特別教育プログラム(旧ABP副専攻、135ページ参照)、国際交流ラウンジなど、本学が持つグローバル教育等のリソースを受講者に紹介しつつ、留学や国際交流に関心を持ってもらうことを目的として、大学教育センターの教員と連携して授業を実施することとなった。令和2年度春学期は、静岡キャンパスでは2クラス49名の受講者に対し3名の教員が4コマを使って、浜松キャンパスでは1クラス32名の受講者に対し2名の教員が3コマを使って、海外留学プログラム、グローバル・アジア特別教育プログラム、留学生との交流などについて情報提供を行った。

英語科目部との科目上の連携は初めてであり、かつ令和2年度からの新しい取り組みとして留学希望者拡大に寄与することが期待されたが、残念なことにコロナウイルス感染拡大により、海外渡航開始のめどが立たない中での実施となった。そのため、現時点では留学につなぐというもっとも重要な観点からの検証はできない。また、授業内で英語を使って留学生と意見交換をしたり、交流したりする内容も計画していたが、teamsを通じて、あるいは撮影した動画を見る等に変更を余儀なくされた。

予想外の状況下でのスタートではあったが、「ESP I (留学)」の受講者は学内の様々なグローバルリソースに触れていることが分かっている。まず、9名がグローバル・アジア特別教育プログラムの科目を履修している。また、授業ではないが、4名は国際交流討論会「話っ、輪っ、和っ!」の実行委員として、2名が「スチューデント・アンバサダープログラム」(令和2年11月開始)に参加登録して活動している。

今後、渡航制限や対面授業がどの程度まで緩和されるかは予測が難しいが、留学に関心がある層へ入学直後に直接働きかける試みは、海外留学への関心喚起に大きな意味があると思われる。今後、英語科目部との連携をさらに深めていきたい。